

聖書日課 『からし種』 2023. 1. 29-2. 5

<p>29日 (日) ヨシュア 2章</p>	<p>「あなたたちの神、主こそ、上は天、下は地に至るまで神であられるからです」(11節)。カナン人ラハブの信仰告白。ラハブはエリコ王の命令に背いて、イスラエルの主なる神を信じて斥候を助けた。何という大胆な決断だろうか。剣を手にした王よりも、まだ見たことのない神を信じる。その信仰のゆえに、ラハブがキリストの系図に連なる者とされたことを覚えてたい。</p>
<p>30日 (月) ヨシュア 3章</p>	<p>「全地の主である主の箱を担ぐ祭司たちの足がヨルダン川の水に入ると、川上から流れてくる水がせき止められ、ヨルダン川の水は、壁のように立つであろう」(13節)。荒れ野の旅の一番最後に刻まれたヨルダン川の奇跡。神が生きて働いてくださらなければ、荒れ野の旅は成り立たなかった。私たち各々の人生にも、必ずヨルダン川の奇跡が刻まれている。</p>
<p>31日 (火) ヨシュア 4章</p>	<p>「主がヨシュアに命じて民に告げさせたことがすべて終わるまで、箱を担いだ祭司たちはヨルダン川の真ん中に立ち止まっていた」(10節)。祭司たちの仕事は、民が最初に川を渡り始めて最後の一人が川を渡りきるまで、川の真ん中に立ち続けて祈り続けること。いつまた増水するか分からない恐怖の中で、その奉仕に命じられた祭司たちの信仰の闘いを想う。</p>
<p>2月1日 (水) ヨシュア 5章</p>	<p>「ヨシュアは、自ら火打ち石の刃物を作り、ギブアト・アラロトでイスラエルの人々に割礼を施した」(3節)。エジプトを脱出した時の戦士たちは不信仰のゆえに荒れ野で死ななければならなかった。今や人々は約束の地に入るにあたり、父祖たちの不信仰を身体に痛みとして刻むことを求められる。不信仰を思い起こす痛みの中に、主の恵みは生きて働きたもう。</p>

聖書日課 『からし種』 2023. 1. 29-2. 5

<p>2日 (木)  ヨシュア 6章</p>	<p>「七度目に、祭司が角笛を吹き鳴らすと、ヨシュアは民に命じた。『鬨の声をあげよ。主はあなたたちにこの町を与えられた』(16節)。堅固なエリコの城壁は人の力では打ち崩せない。神が「よし」として働いてくださるのを「信じて待つ」。けれども「信じて待つ」ことはなんと難しいことか。「主よ、信仰なき者を助けたまえ」と祈る一步を素直に踏みださせてください。</p>
<p>3日 (金)  ヨシュア 7章</p>	<p>「このようなわけで、その場所の名はアコルの谷と呼ばれ、今日に至っている」(26節)。主の命に背いたアカンの罪は白日の下にさらされ、死の償いを求められた。しかし主なる神はその「アコル(苦悩)の谷を希望の門として与える」(ホセア 2:17)と約束してくださっている。罪の償いは死であるけれど、その罪と死の中に希望の神の働きがあることを覚えたい。</p>
<p>4日 (土)  ヨシュア 8章</p>	<p>「ヨシュアはこの祭壇の石に、モーセがイスラエルの人々のために記した教えの写しを刻んだ」(32節)。祭壇の石に刻まれたモーセの教えは、人々が祝福と命を生きるための言葉だった(申命記 30:19)。新約の福音に生きる私たちは、十字架に刻まれた主の赦しのもとで、鬨の力の支配から救い出されて御子の愛の支配に生きる者とされる(コロサイ 1:13)。</p>
<p>5日 (日)  ヨシュア 9章</p>	<p>「指導者たちは皆、共同体全体に言った。『我々はイスラエルの神、主にかけて彼らに誓った。今、彼らに手をつけることはできない。我々のなすべきことはこうである。彼らを生かしておこう。彼らに誓った誓いのゆえに、御怒りが我々に下ることはないだろう』(19~20節)。欺きの誓いであっても、主にかけてた誓いを、守りきる誠実を持ち合わせているだろうか。</p>